Đại Học ngắn hạn Iwaki tại Fukushima, Nhật Bản đã đăng tải một phần luận văn tốt nghiệp Cử Nhân vào ngày 20.4.1978 cho các Sinh Viên Đại Học tham khảo.

いわき論集

目　　次

手漉和紙業における専業の形成について
—分布論的考察—　……　関　恵司　……　1

IMF・GATT体制の意義と限界
—戦前・戦後の経済政策の相違点についての一考察—　……　高崎譲治　……　7

般若心経における色と空　……　山下庫司　……　21

いわき地方における二・三の地質学的特性について(その1)……柳沢一郎　……　29

相続制度の歴史性
—南北朝鮮の現行制度を中心に—　……　李　丙洙　……　35

F・ルエラン著
日本における米の生産　……　菊池一雅訳　……　43

研究資料
明治時代における日本の英語教育について　……　レ・クォン　……　53

いわき短期大学商経学会

1978

いわき短期大学商経学会会則

第 1 条　本会は「いわき短期大学商経学会」とよぶ。

第 2 条　本会は会員の研究およびその発表を目的とする。

第 3 条　本会は前条の目的を達するためにつぎの事業をおこなう。

1. 「いわき論集」および「ゼミナール紀要」の編集ならびに発行
2. 研究会および講演会などの開催
3. 評議員会が適当と認めたその他の事業

第 4 条　本会の会員はつぎのとおりとする。

1. 普通会員　本学教員および在学生
2. 賛助会員　本学卒業生および本会の趣旨に賛同し、かつ評議員会の承認をえた者
3. 名誉会員　本会のために多大の功積があり、かつ評議員会が推薦した者

第 5 条　本会の会員は機関誌の配布をうける。

第 6 条　本会につぎの機関をおく。

1. 名誉会長　本学学長を推す
2. 会　　長　評議員の互選による
3. 評 議 員　本学専任教員

評議員会は評議員をもって構成し、本会の運営にあたり、会長が議長を兼ねる。

4. 評議員は編集委員、会計委員、庶務委員各若干名を選出できる。

第 7 条　本会の経費は会費、事業収入、寄附金などをもってこれにあてる。
ただし、会費は評議員会の決議したところによる。

第 8 条　本会の会計年度は4月1日にはじまり翌年3月31日におわる。

第 9 条　本会は事務局をいわき短期大学内におく。

第 10 条　本会則は昭和50年4月1日から効力をもつ。
ただし、本会則の変更は評議員会の決議による。

資　料

明治時代における日本の英語教育について

レ・クォン

ベトナムにいた時、私は、世界史の時間が大好きであった。世界史には、世界の事情、狀況、政治、経済、教育などが出て来るのであるが、中でも私が一番関心を持ったのは日本の明治維新のことである。フランス革命（１７８９年）、中国の革命（１９１０年）、あるいはロシア革命（１９１７年）等、数ある革命の中でも、特に日本の明治維新（１８６８年）について深く研究したいと思った。これは、日本に行きたいという、私の一つの大きな理由となった。

なぜ明治維新は有名になったのか。日本という国はずっと前から東洋文化の影響を受けてきた国である。特に、中国の文化を中心として吸収し、政治、文化、宗教、経済等を形成、実現して来たのである。明治維新というのは、この長い伝統の中での一大革新であった。ちょうどこの時代から日本は西洋文化のの影響を受け、実践科学主義を習いはじめたと言えるであろう。もちろん、明治維新以前においても、西洋の学問を吸収したが、それはオランダ国との国交しか触れる事ができなかった。それが、ひろくヨーロッパ、アメリカの新しい文化を吸収する時代に切りかわったのであるから、明治維新は、日本にとって一大革新であったのである。

この明治維新の特色の一つは、日本は農業國から工業国へと進んで行ったことである。この意味で、この維新ということは現在の日本の近代化の源泉だったと言えるのである。

ところで維新と革命はどういうふうに違うのか、「維新」というのはすべてがあらたまり、あたらしくなることである。「革命」は王朝が代わること、あるいは政府が代わるのである。維新と革命とはそれぞれ意を異にしているのである。

特に日本の王朝は他の諸国の王朝と違っている。日本は、今まで１２３代も天皇が在位しているが、外国の場合は王朝がよく変わっている。王朝、あるいは政府などが代る時、これは革命と言える。しかし、明治維新は革命と言えない。天皇制が変わらなかったからである。私にとって、維新という言葉には殺す、殺されるという意味がないと思う。というのは、以前が古いから、今から維新する、新しくなおすことと思うからである。しかし、

革命という言葉を聞いたら、この言葉の中だけでも、血を見る印象が私の胸に残っているのである。

前王朝、前政府と戦い、人命を落とさなければ政権交代が成功出来ない時に行なうのが革命ではないかと思えるのである。

この様な簡単な理由で、私は明治維新について研究したいし、考察しなくてはならないのである。

しかし、何を勉強するにしても、一番大切なことは言語である。西洋の文化で、一番影響が深い言語は英語、フランス語、ドイツ語である。でも、どうしても英国また米国の方が他の国よりも影響が深いのである。

日本の英語学は、文化5年（１８０８年）からはじまったと言える。これは英艦フェートン号が長崎に侵入した時である。日本人はこの時から英語を勉強する必要が出来たのである。

もちろん、その時期と現在とを比べれば違う点が沢山出て来るのであるが、過去の事を知らなければ現在の結果も解かないし、現在のことがわかなければ未来の行き方も理解することができなくなってしまうのである。

私自身、外国人であるので言語という問題は一番大切あると思うから、日本人が初期の英語を受け入れる時、どうであったのか非常に興味を持ち、この「明治時代における英語教育について」を書く理由になったのである。

特に、日本語は文法が難しいから、他の国の言葉よりも勉強に時間がかかる。でも国と国との文化の伝達の為に、私はこの身体を渡り橋にしたいと思い、なんとかこの明治時代の日本の英学について考察したいと思う。

日本人が、学問の中心を蘭学から英学に移したのは、文化6年（１８０９年）から始まったと言える。その１年前、長崎港に英艦フェートン号が侵入して以来、日本人あるいは日本文学界の関心等がこの時期から転換した。文化６年から明治維新（１８６８年）にかけて約６０年間日本の英学がどの様な進歩をして来たか、詳しく考察してみたい。

６０年間をわたっても、日本側の英学者はまだ出て来ない。幕府は日本の学生を留学生として英米に送る。慶應元年（１８６５年）薩藩の森有礼ら１９名はひそかに英国留学へ出発した。もちろん、その前に英語の本、辞書を訳した人もいたが、この時期に、最初における日本の英学の様子が見られる。米国側の宣教師らも渡来する。

明治初期に入ると外国語の学校がだんだん設置された。留学生も英米に何回も送ったのであった。

この時期英米から代表的な人物、伝教師などが多く見えた。やはり、これは、日本国内の英学人材がまだ足りないので外国人が必要であったからだと思われる。

しかし、なぜ蘭学をそのまま続けて行かなったのか、なぜ日本国民は英語を学ばなければならなかったのであろうか？

事実、英語は世界で一番文明国の国語であったのである。日本が最文明最強国の言葉を学ぼうとするのに何の不思議もなかったかも知れない。その頃の英語は、その栄華の絶頂に達していたから日本は蘭学から英学に変った一つの理由なのであろうか、明治元年は１８６８年であるが、英国の最盛期は凡そ１８７０年と思われる。

新日本国を建設するに於いて英国の伝統の経験主義、実利主義などを学ぶため英学に転換したと思える。あるいは英国的自由主義を理解するために日本人の目的が変ったのである。

明治新政府は富国強兵策を実現するため、西洋先進国へ向わなければならないのであるから、留学をしたり、技術を学んだりするのは当然なことである。

明治４年に中村敬宇の訳した「西国立志篇」の影響が強かったから、英学の影響もだんだん広くなった。

明治５年日本政府に於ける御雇外国人は、英人１１９人、仏人５０人、米人１６人、その他で計２１４人、３分の２が英米人であった。この統計を見ると、やはり明治初期の日本人に人材がたりないから、外国人教授を雇用したことと思われる。

しかし文学的に見るとヨーロッパ文明の導入以来の英学書の出版は明治５年を以って最高頂とすると言われているが、それから西南戦争が過ぎると翻訳小説が流行し出した。おびただしい小説が訳出された中で、政治小説が特に歓迎された。それは矢野文雄「経国美談」（明治１７年）、東海散士「佳人の奇遇」（同１８年）、末広鉄腸「雪中梅」（１９年）等である。これらは日本の政治小説を創作に導いた始まりである。坪内逍遙の自由太刀余波鏡鉢」（１７年）はシェックスピアの「ヂュリアス・シーザー」の訳であるが、相共に国会開設に至る日本の道を開いたものであったと言えよう。

この西南戦争前後１０年が明治英学の初期であるとされる。

明治時代における日本の英語教育には、いろいろな節目があるが、ここで省略する。例えば明治初期の英語学校の設置、英語教師の採用、英和及び和英辞書の発達などはそれぞれ明治初期に始まる。あるいは明治中期（２０年－３２年）の中期の生徒における英語教育、英語の発音と日本人、明治末期（３３年－４５年）に入ると英語教育に関する著作、英和訳の著作、森有礼の英語国語化論など、たくさんの節目があるが、ここで「森有礼の英語国語化論」について、私は、外国人の目で見て論じてみたいと思う。

言語というのはその国の言葉である。その国の民衆の生活を表わしている。習慣、礼儀、信仰、あるいは文化、それらはその国のすべてのことを表現する。その国が文化を持つならばもちろんその国の言語がある。もし、文化があっても自分の国の言葉がなければ、そ

れは不連続の存在となる。もしも言葉があっても文化がなければ、それは未開部族である。だから言葉というものは大切である。

森有礼は英語を国語化するについて沢山の論争を起こした。なぜ森有礼がそういうふうに考えたのであろうか。

彼は慶應元年（１８６５年）イギリスに渡航してロンドン大学にて化学や数学を学び、慶應３年（1867年）アメリカに渡り、その後明治元年(1868)帰朝した。

「森有礼の英語国語化論は森が日本公使として米国に滞在中の明治６年に著わした『日本の教育』（Education in Japan : A series of letters addressed by prominent Americans to Arinori Mori, New York, 1873）に出ている。その一部分は「日本教育策」と題して翻訳されている（『明治文化全集』（教育篇)所収)が、その序論に述べられている森有礼の意見をまとめると次のようになる。

(1) 日常語は数が少なく、くかも大部分が漢語である。漢字を仮名で書くことは不便であり、実行不可能である。

(2) 漢語の助けを借りなければ伝達手段として役に立たないということは国語の貧弱性を示す。

(3) 今日の世界は英語国民の商業力の支配下にある。国の独立維持のためには英語を習得することが絶対に必要な条件である。

(4) 西洋文明が全面的に採り入れられるとき、日本国内に英語が氾濫する運命にある。

(5) 日本語のような貧弱な伝達手段によっては西洋文明を吸収することはできない。

（日本の英語教育史196項～197項まで)。

以上、森有礼が述べた一つ一つの問題をを分折するとどのようになるか。もちろん、この英語国語化について学者たちが論争したが、私は外国人の目から見て少し意見を述べたいと思う。

日本語というのは日本人の持つ言語である。なぜ英語を取り入れなければならないのであろうか。もし、日本語が英語化されれば日本人という言葉は消えてしまったかも知れない。アメリカかイギリスの属国になったであろう。日本人が存在する限り、日本語がなければ、日本人とは言えない。歴史を見ると、植民地が広まった時、大きな国がが小さな国を支配した。植民地政策は属国の民衆を愚民化し、言語も自国語を被支配国に強制したのである。例えば私の国（ベトナム）では19世紀後半（１８６６年）から２０世紀前半（１９４５年）まで約８０年間フランスの植民地であった。彼等が一番大切にしたのは教育である。教育というよりも言語である。ベトナムのすべての学校はフランス語を教えなければならなかった。フランス語はベトナム語の代わりに使わなければならず、ベトナム語は外国になった。しかし、ベトナムが独立してからは（１９４５年）ベトナム語を国語とし

て使いはじめた。また自分の国の言葉は他の国よりも良くないと思ったら、その人は売国奴であると言う人もいる。ベトナムの問題だけでなくインドあるいは台湾、それからアフリカ諸国等、独立してからは自分の国の言葉を守ってる。

特にフランスの文化は高いと評判があったがフランスの文化とフランス語とは違うのだ。だからベトナム人はフランスの言語より自国語方が良いと選んだ。ただ、日本は島の国であり、幸いに日本人は他の国に支配されなかったから森有礼は自分自身、植民主義がわからなかったので、英語国語化と言ったのであろう。

「日本語は大部分が漢語から借りる」と言ったが、これは当然である。しかし日本は音読がある。訓読なら日本語ではないのか？

日本では平安朝以来漢文が学問の言葉である。しかし、日本文化は中国の文化の影響を受けたが、日本語が中国語になったのではなかったのである。

現在英語は世界語と言えるけれども「商業」と貿易のために英語を国語化して良いものであろうか？

西洋文明はギリシヤ、ローマ以外、イギリスやアメリカなどは日本よりも新しい国家ではないのか？アメリカは建国後２００年経ったばかりだから、アジアの文明に比べれば未開民族であろう。アジアの文明は精神的な文明である。アメリカの文明は物質の文明ばかりを人間に与えるから、精神不安、精神混乱が問題になった。

以上、私は外国人からみて森有礼に不賛成の意見を述べたが、私自身、日本語について意見を述べたい。

日本語は外国語の中で一番か二番目に難しい言語と言えるけれども、なんとか、簡単にして外国人にわかりやすいようにするのが日本人の責任である。その為、日本語を変化改革しなければならないのである。

もし日本語を全部ローマ字に書いて直したらどうなるであらう。ローマ字は明治時代に盛んとなった。

「明治１９年チェンバレンの『ローマ字日本語読本』（A Romanized Japanese Reader）が出版された。同年第3版を出したヘボン辞書はローマ字会式を採用したが、これがほぼ現在のヘボン式となっている。それまでのヘボン辞書は仮名遣い主義であったが、ローマ字会の発音主義となった。たとえば shiyatsu（シャツ） hiyaku（百）→（shatsu, hyaku）。ローマ字会は会員数２万にも達した時もあったが、明治２５年に解散した。 "Rōmaji zasshi"（１９年２月１０日号）を見ると「英国公使ブランケット氏の演説(チェンバレン氏訳述)」が出ているので、その一節を紹介する。

Shikashi , shokun yo ! kono kai no moukuteki wa , nan de arimashō? Kouo kai no mokuteki wa , gakujutsujō mizou no dai－henkaku de arimas－

uru. Kore made arikitari no Shina−moji wo haishi, kore ni kaeru ni no nijuu−yo−ji wo motte suru toki ni oitewa, fRoomaji utatsu no ooi naru rieki uru koto ga arimasu. Hitotsu ni wa, Seiyoo kakkoku to koosai wo hiroku shi; futatsu ni wa, Shina−moji ni jikan wo tsuiyasu tema wo habuki; motte konnichi no bummei − sekai ni hitsuyoo naru jitsugakujoo ni sono tema wo mochiita naraba, sunawachi 37,000,000 nin no saiwai to iu mono de arimashoo.

（しかし諸君よ、この会の目的は何でありましょう。この会の目的は学術上未曽有の大変革であります。これまでありきたりの支那文字を廃し、これに代えるローマ字の２４字をもってするときにおいては、二つの大いなる利益を得ることがあります。一つには西洋各国と交際を広くし、二つには支那文字に時間を費やす手間を省き、もって今日の文明世界に必要なる実学上にその手間を用いたならば、すなわち 37.000.000人の幸いというものでありましょう。『日本語の教育史』２０３－２０５項）。

上の文章をみると、やはりローマ字になってもまだ日本語である。ここでは英語国語化の必要がない。ただ日本語はローマ字ばかりを使うと同じ発音で意味のちがう言葉が沢山あるので、これは問題である。しかし、日本人の名前でも日本人に読めないものが沢山あるので、ローマ字になった方が良いのではないかと思う。外国人は始めて日本語を習う時、ほとんどローマ字で教えられるのである。外国人は日本語が全部ローマ字であればと思う人が多い。私の意見も日本語をローマ字に直した方が良いとする者である。そうすれば外国人も日本語の理解をしやすいし、日本語も国際的になりやすいと思う。このままでは日本語というものは日本人にしかわからないのである。日本人は東西南北の文明に影響を与えるのに、伝達するところがなければそれは不幸だと思う。伝達するためには言葉が一番大切であるから、何とかして日本語をなおさないと話しにくい。例えば私たち留学生は日本に来て日本語を勉強し、日本人から日本語を習っても日本人のように日本語をよくしゃべれない。日本に５年いても10年いても決して日本語が上手になれない。私たちはなまけものではない。ただ日本語が難しいのである。ひらがなもあるし、かたかなもある。漢字もある。ローマ字もあるのだから相互理解がしにくい。例えば馬場辰猪の英語採用反対論を見ると、彼は明治３年９月にロンドンへ行き、明治６年にその反対論を全部英語で書いた。在英３年であったがこのように英語で書けた理由は何であろうか？彼は天才とは言えるかも知れないが、やはり英語が日本語よりも勉強しやすかったからであろう。これは

『日本語文法』 ····· An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises (1873)·····

We have two objects in publishing this book . The first , to give a general idea of the Japanese language as it is spoken , and thesecond , the protest againt a prevalent opinion entertaied by many of our countrymen , as well as foreigners who take some interest in our country , and to show the reasons why we do so . It is affirmed that our language is so impefect we cannot establish a regular and systematical course of education by meaus of it ; and that thebest way is to exterminate the Japanese language aitogether , and to substitite the English language for it . Those who maintain this opinion ought to have examined the language and proved its imperfection as a medium of intelletcual thought and expression , but so far as we are aware they have not done so . 『日本英語の教育史』195－200項。

結局、森有礼の英語国語化について、外国人の私から、日本の明治時代の事情を見た上での問題についての意見は以上である。多少その意見に対し、反論があるかとも思うが、これは事実だと思われる。

今まで「明治時代にける日本の英語教育」を述べて来たが、私にとって何か深い意味があると思う。ここで、結語の代わりに私の目で見た日本の英語教育（明治時代）について述べたい。

私自身外国人であるが、ヨーロッパ人ではなかったので、西洋の英語の便い方、日常の英語の話し方などの経験がなかった。私はアジア的に私の国と同じく英語を外国語とする日本の現場の教育的制度を検討していきたいと思う。

明治初期から末期にかけての４５年間に英学が成長したのを見て分かる様に、日本に於いては明治時代の急激に英学がもっとも有意味であったと言えるだろう。また、明治初期から末期にかけて英語学だけでなく、ヨーロッパの文化、技術なども深く影響したと思われる。

明治初期には日本国内は人材不足のため、外国人教授、技術者、機械などを導入、勧誘したりした。あるいはヨーロッパに留学させた森有礼、津田梅子、馬場、坪内などがいた。こういう人々は自分達のためだけでなくて、日本の末来のために勉学した。今日、日本国がこういうふうに立派になったのは彼らの働らきと言えると思う。

長い間、日本の文化は中国の影響を受けていたが、明治になってヨーロッパの文化、技術と東方の文化とが調和した点に日本の世界的な一つの視点が見える。

私は、外国語を勉強すれば、その国の民族文化、感情、礼儀、教育、社会、宗教などを

理解する事ができると思う。もし、何も研修しなければ、昔の鎖国時代とかわらない。英語は世界語であり、人類の一つの共通性はこの代表的な言語からはじまると思われる。そうすれば、この地球上に於いて人類の未来ではどこに行っても、何を言思でもこまることがなくなるであろう。その日はまだ遠いかも知れないが、以前から比べれば、今日の人類はだんだんそれに近くなって来たと思う。これは、やはり、言語の伝達の方便なのであると思う。

将来も、日本語が改善すれば、世界の共通性がもっとも広くなりやすいと思う。日本の場合も同じように、国の建設、国際親善のために、世界の国と交流してお互いに助け合うという人類は兄弟の様な活躍ができると思う。もちろん優点の中で欠点もあるが、代表的に検討するならば、日本という国は文学的にも技術的にも立派な国、すばらしい国だと思う。

これを以って、結語として、以上のことを述べた。　　（原文のまま）

執筆者紹介（執筆　順）

関　　恵　司		城西歯科大学
高　崎　譲　治		いわき短期大学　講　師
山　下　庫　司		いわき短期大学　教　授
棚　沢　一　郎		いわき短期大学　教　授
李　　丙　洙		いわき短期大学　教　授
菊　池　一　雅		いわき短期大学　教　授
レ・クォン		ベトナム人留学生

編集委員（◎印は編集委員代表）
斎藤五蔵　山下庫司　李　丙洙　◎菊池一雅

―いわき論集―

1978年4月20日　発行
（非売品）

発行者　いわき短期大学商経学会
会長　菊池　一雅

〒970　福島いわき市平鎌田山
いわき短期大学　内
電　0246（74）9185・6

印刷　水野印刷

IWAKI RONSHU

Contents

Keiji SEKI

On the Formation of a Monopoly in the Handmade Japanese Paper Industry

—— A Studv of Its Distribution ——

Jyoji TAKASKI

The Meaning and Limit of the IMF and GATT Systems

—— A View on Difference between Prewar and Postwar Economic Policies ——

Kuraji YAMASHITA

Matter and Void in "Hannyashingyo"

Ichiro YANAGISAWA

On Some Geological Features of the Iwaki District

Byong S. Lee

A Historical Nature of the Inheritance System

——With Special Reference to the Present System in North and South Koreas——

Francis RUELLAN

Kazumasa KIKUCHI

La Production du Riz au Japon

Materials

L E Cuong

On Japan's English Education in the Meiji Era

1 9 7 8

SHOKEI GAKKAI OF IWAKI JUNIOR COLLEGE